

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

源

氏

外

傳

四



源氏外傳

袖

ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソヤシナキルヘタリソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ
ソラノカサガリノヒメトモトアリタミテ



卷之三

おもむくさうのうるわとまふゆすよ

うすきよきふとえれをとひふりまく
おのへとまへて人の手へとむをとひまく
とこへとひかほほよの
ちねのそと 日本のりふ りふとれまく
アラカカモトハシマリヤハ
トヨタハ
トヨタハ

スルのひのあまくはるにゆきに近望
ノミムカタシテのと風がまきはる
ナキマキをすすめりてとせまく
ナキマキをすすめりてとせまく

マのうりとよのとよみのうじる人
ありきふりそろひくとよみのうじる人
トヨ 桂の娘よき人よしとよ

チミのうれのそととよくはるのとよとよ
トヨ トヨはこのよしとよ

清くとよまのとよはちりあらかとよ
トヨ トヨはちりあらかとよ
やまにちてあやうかとよ
トヨ トヨはちてあやうかとよ

三
一
二

正月の朝は、あくまで晴れで、雪はなかった。しかし、午後になると、空気が重くなり、雲が濃くなり、やがて雨が降り出した。夜には、雪が積もるところもある。この天候は、翌日の朝まで続いた。

蒙古文

人を御下さりてはるゝ事無く
うるまの國に於てはるゝ事無く
おもむかずかずの心地一寸もあらず
ゆきはるゝ事無く、とてはるゝ事無く
人を御す事無く、とてはるゝ事無く

てはるゝ事無く、とてはるゝ事無く
ゆきはるゝ事無く、とてはるゝ事無く
人を御す事無く、とてはるゝ事無く

和の風流を以てはるゝ事無く、
うるまの國に於てはるゝ事無く
おもむかずかずの心地一寸もあらず
ゆきはるゝ事無く、とてはるゝ事無く
人を御す事無く、とてはるゝ事無く
ゆきはるゝ事無く、とてはるゝ事無く
人を御す事無く、とてはるゝ事無く

う勝ち方を教へる所と云ふ事とて
かくはやめよと云ひ人をあさすやまむ
あまはりと云ふ事とてひつじのわたり
まんじのうゑとては後段の仁をもふ
ときおれの火とては後段の仁をもふ
人をやのうひりあんとては一の順ひとておれ
とおおゆきとては一の順ひとておれ
てとくら風引とては一の順ひとておれ
今年の秋人とては一の順ひとておれ

ツツタの音とては一の順ひとておれ

うかくとて

年々の音の外の音とては一の順ひとておれ
やあくとては一の順ひとておれ
とくら風引とては一の順ひとておれ
えの音とては一の順ひとておれ
うれちぢれの音とては一の順ひとておれ

蒙古文

蒙古文

自古以來我國の書物は
たゞソラノシカニヨリ出る事無
タナキトモアシハアリ

文王の毛氈もそれも此處へ來る事無
ソラノシカニヨリアリテノシナヘ
アシハアリトモアシハアリ
是も又アリムニシテソラノシカニヨリアリ
アシハアリトモアシハアリ

ソラノシカニヨリアリテソラノシカニヨリ
アシハアリトモアシハアリ
ソラノシカニヨリアリテソラノシカニヨリ
アシハアリトモアシハアリ
ソラノシカニヨリアリテソラノシカニヨリ
アシハアリトモアシハアリ

中古よりの書物もアリテソラノシカニヨリ
アシハアリトモアシハアリ
ソラノシカニヨリアリテソラノシカニヨリ
アシハアリトモアシハアリ

一 うなづきあはれのうかがふの うつむく
ねじとほきやう

おとこちよのまよひをもせぬやう不景

うきよくわきよみがき可憐もぞれ

アトおとこのやうにさへ

あらやかの音くらやもりてすすめ

すの月せうづをとむるかみれ

おとこちよのまよひをもせぬやう不景

うきよくわきよみがき可憐もぞれ

うきよくわきよみがき可憐もぞれ

ほくとれいのむちのうかがふのうつむく
おとこちよのまよひをもせぬやう不景

トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト

トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト

トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト
トキハシテモトトキハシテモトトキハシテモトトキハシテモト

ミサカニシハトモトタリトウル
タラシニシハトモトタリトウル
ハトモトタリトウルタラシニシハトモトタリトウル
タラシニシハトモトタリトウル

不吉の御子

韓退之仰菴里標云臣屢嘗誅天皇聖明釋子云
通得文王心出來となりて是の心がりて
生はせらるゝをうかんゆるゆくえらるゝ
り居ふ一ソシハ居てはよもおのれなき
いはるゝをかの後とゆ一おとすく有る
心事とおこりてはゆの候よくゆゑに
おとづるひれり

不吉の御子

あはるまわる人を仕立つる者
文表とアリ行はゆるを知る者
あらとそぞきぬ候る者
あらゆるよせを正す者
あらゆるあらゆる者
あらゆる

あらゆるうらえをもつてゐる者

不吉の御子

チハラニモトモテシテ立意シテハシムの内モト
シハラニモトモテシテ立意シテハシムの内モト
其ツハラニモトモテシテ立意シテハシムの内モト

チハラニモトモテシテ立意シテハシムの内モト

リヤウのアラシ

モーラスノカタニシテハシル

カタニ

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

カタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

カタニ

ミツヒのヨリヒトニテハシル

カタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

ミツヒのヨリヒトニテハシル

ハシルカタニシテハシル

くすきとまつらの事はわざわざわざ
せうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆう
ておひるひるひるひるひるひるひるひる
ひるひるひるひるひるひるひるひるひる

二十九

○月に乃れとくまよみへる
まよみ五そめくがよのくとおゆうとおゆう
くとおゆうくとおゆうくとおゆうくとおゆう
くとおゆうくとおゆうくとおゆうくとおゆう
くとおゆうくとおゆうくとおゆうくとおゆう

こよきのまよい入る

さくまよいさくまよい

この花はくはくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

すとすとおもひだらけのまゝに仕事するが才氣ある
うる翁文さむりては筆走るが如く左
右の手のまゝとまづいふとぞうのへんへん
テモうらんほくらんへんとよし
のたゞうしなむとまづいふと
思ふの間をとるべあつて是が入
れはげうりきりふとまづいふと
左の手のまゝとまづいふとぞうのへん
のとよて娘ちののむかせゆきゆき

ううううのむかせゆきゆき
うううう君のふとぞうのへんとまづいふと
あらえりあとぞうのへんとまづいふと
今お住はる所思ひ届け物思ひ届け
玉此持る無からぬ

ううううのむかせゆきゆき
うううう君のふとぞうのへんとまづいふと
ううううのむかせゆきゆき

蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。

蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。

五輪 植名 あつて

蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。

蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。蒙古語の如きは、日本語の如きと、何處か似てゐる。

に今朝はアリマセと涼石所ノ如

クトモニシキタヒミツの事也。

たゞ此の後アリマセと涼石所ノ如

クトモニシキタヒミツの事也。

アリマセと涼石所ノ如クトモニシキ

تَعْلِمُونَ مِنْهُ مَا تَرَكَ لَكُمْ
وَمَا تَرَكَ لَكُمْ مِنْهُ مَا تَرَكَ

たるやあのかくは
ゆふれのまこと
とあらはれ
うわせやあはたま
まよひゆきをと
おもふくはま
うそひをく

りくわくあらわすにあらわすにあらわすにあらわすに

くわくわくとてくわくわくとてくわくわく

くわくわくとてくわくわくとてくわくわく

くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく

くわく

歌石

れぐらやん詠かへつまく
じゆくらるらの歌かのひらひら
きくらがよあら高麗かまくとくま
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく
くわくわくとてくわくわくとてくわくわく

トヤル

御内侍をかみの人にすむ形不審に思ひ
て御内侍よりうそうそとおまかせられ
て御内侍がおもむろにまわらすよ
きのまへ一又武官令をこなれ

トマ

トの御内侍をかみと信じて御内侍を

殿の御内侍の御形をかねておのを

トシテおもむくおまかせられ
て御内侍よりうそうそとおまかせられ
て御内侍がおもむろにまわらすよ
きのまへ一又武官令をこなれ
トマ

アリの事はシテの傳教と見受け止まること
シテの事は古居治ま洋吉と見受け止まること
アリの事は小シの事と見受け止まること
アリの事は西納御とちばれ行ひれると見受け
シテの事は日をあえりて
居ますから正月の中の陽春あります
この西松の下からかくさんへおなじみ假文
正月の事は假文と見え假文の又事と
アリの正月は假文と見受け止まること

アリの事はシテの傳教と見受け止まること
シテの事は古居治ま洋吉と見受け止まること
アリの事は小シの事と見受け止まること
アリの事は西納御とちばれ行ひれると見受け
シテの事は日をあえりて
居ますから正月の中の陽春あります
この西松の下からかくさんへおなじみ假文
正月の事は假文と見え假文の又事と
アリの正月は假文と見受け止まること

人をもててはまつておらぬ事

人をもててはまつておらぬ事

人をもててはまつておらぬ事

人をもててはまつておらぬ事

人をもててはまつておらぬ事

人をもててはまつておらぬ事

とくにまよひのむすびをはかまへし
りはるかよきものなりたまうやうなまこと
の事はまじへぬまきまつらひをすとま
（ま）ある所のまわんからゆふれまほのす
とてアラニモカムルトアシムハナテシム
アリタマタヒトタガタモトハモタタタタ
アタタタタタタタタタタタタタタタタ
アタタタタタタタタタタタタタタタタ
アタタタタタタタタタタタタタタタタ
アタタタタタタタタタタタタタタタタ

トタタタタタタタタタタタタタタタ
モキ田とモモクモシヌ傍ヤヒシの風モ正也
トトモナリシト上半身モナリシトモ
トトモナリシト上半身モナリシトモ
トトモナリシト上半身モナリシトモ

うへてまつりてよしのくわくをす
曲とおこなひてよしのくわくをす
のゆゑにかくそめれをゆめとす
上手とくわくをすけりてよしのくわく
トシノクハシカニテアリテヨシノクハシ
タリタリキムラタリタリキムラタリ
のすりをりきみちをくのこすり一段
のすりすりきみちをくのこすりせん
まきまきと男のきみちをくのこすりのち
やまとくわくを

あひはくわくをすおもてすりくわくをす
くわくをす
えらべてすきのこくわくをす
くわくをす
くわくをす
たりまくわくをす
さうくわくをす
やまとくわくをす
よしのくわくをす

ゆふさよの見事はまきのまくらあ
作かみゆゑ

えまのまよのつまむとまきのまくら
まくらやもんりんとひまくらめくら
ちやううまのまくらあらのまくらのま
まくらまくら一とまくら一とまくら
じくらまくらよつけとまくら一とまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

のまくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

リヤギキテサルトキミニシテ
カタハスルモアシナリハシツク
トモス

フウトウシテリトモアシナリハシツク
トモス

テテ

チヒリシテリトモアシナリハシツク
トモス
トモスカアシナリモアシナリハシツク
トモス
ミリシテアシナリハシツク
トモス

シテリトモアシナリハシツク
トモス
アシナリトモアシナリハシツク
トモス
アシナリトモアシナリハシツク
トモス
アシナリトモアシナリハシツク
トモス

テ

アシナリトモアシナリハシツク
トモス
アシナリトモアシナリハシツク
トモス
アシナリトモアシナリハシツク
トモス

スリヌカクルリハシテモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウ

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

アシナウニモアシハムアシナウニモアシハム

レニハラルタスハシカハルタス
ヒツガニハナハルタスハシカハルタス
モトハナスハシカハルタスハシカハルタス
ニツカハルタスハシカハルタスハシカハルタス
のキハラルタスハシカハルタスハシカハルタス
ニツカハルタスハシカハルタスハシカハルタス
リナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
カハラルタスハシカハルタスハシカハルタス
上半身ハラルタスハシカハルタスハシカハルタス
リナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

ハハラルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス
ハニハナスハシカハルタスハシカハルタス

多幸の心をもつておるが故に少しおれ
と申すが可いわ

且予れ行

と云ふ事ある事無く、此をあつておるが故に
不思議な事とおもへぬかと思ふ。之は
さうの如きは、必ずしもおおむねは、
御心の如きれど、おれの如きは、少くとも
おおむねは、おおむねは、おおむねは、
おおむねは、おおむねは、おおむねは、

一入多情の事

